

カ ン キ ツ 專 業 經 営 の 試 算

森 国 男

(長崎県総合農林センター)

MORI, K.

A Trial on the Specialized Citrus Farming.

I. 目 的

カンキツ經營における反収と規模の經濟性について検討すると共に、これを經營試算に用いるための方法について若干の試論をのべたものである。

II. 内 容

經營における操業度と規模効果をカンキツ經營に適用すれば、操業度は反収、規模は面積である。

一般的には反収が高く、規模が大きくなるにつれて費用、労働とも多額を要するが、単位当りのそれは低くなるとされている。

このことは、カンキツ經營にも認められるが、その内容を検討すれば、次の事項が問題となる。

(1) 費用、労働

費用は変動費(肥料、防除、諸材料等)と固定費(償却、修繕等)に分けて検討するのが適当と思われる。なお労働はこの試算が所得表現を主眼としているので別に扱うことにした。

上記の關係は、反収に関連して増減するのが主として変動費であり、規模拡大によって栽培技術が変らないものとすれば、規模と関連して増減するのは固定費であろう。

労働は反収、規模ともに増減するが、特に収穫が手作業であるため、普通作ではあまり問題とされない反収との関連が強い。

上にのべたことは次のように数式化される。

① 反収との関連

変動費 $V_1 = A_1 + B_1 X_1$ $B_1 \cdots$ 収量別の変動係数

固定費 $C_1 = A_1$

労働 $L_1 = A_1 + B_1 X_1$ $X_1 \cdots$ 反収

② 規模との関連

変動費 $V_2 = V_1$ $B_2 \cdots$ 規模別の変動係数

固定費 $C_2 = C_1 - B_2 X_2$

労働 $L_2 = L_1 - B_2 X_2$ $X_2 \cdots$ 規模

③ 反収段階別、規模別との関連

変動費 $V_3 = V_1 X_2$

固定費 $C_3 = X_2 (C_1 - B_2 X_2)$

労働 $L_3 = X_2 (L_1 - B_2 X_2)$

(ただし、各収量段階の規模別変動係数は同じと見なした)

(2) 試 算

上記の数式に、昭和43年度産温州ミカン生産費調査等の数値を採用し、かつ変動費と固定費を合算し物財費(M)として数値化すれば次のようになる。

反収の1当りでは、物財費 $M_1 = 48,052 + 2,765 X_1$ (円) 総労働 $L_1 = 19.65 + 4.5 X_1$ (H) となり、収量が3,000kgの場合の10a当り規模別は、 $M_2 = 57,627 - 60 X_2$ 、総労働 $L_2 = 33.15 - 0.5 X_2$ となる。

同様にして反収3,000kg、規模が3haの場合は、 $M_2 = 30(57,627 - 60 \times 30)$ 、 $L_3 = 30(33.15 - 0.5 \times 30)$ となる。

(3) 規模別所得 (I)

規模別所得は $I = X_2 (Y P - m) - (X_2 L - H) S$ と数式化される。

$X_2 =$ 規模(反)、 $Y = 10a$ 当り収量(kg)、 $P =$ 生産者価格(kg当り)、 $m = X$ 規模、 Y 反収段階における物財費、 $L = X$ 規模、 Y 反収段階における所要労働、 $H =$ 家族就労可能日数、 $S =$ 雇傭労賃単価、

規模別所得を試算するに際しては、特に収穫時における労働が問題となろうから、こゝでは収穫時の労働のみをとりあげても差支えないだろう。

III. 考 察

上記に用いた諸数値は地域によって非常に異なっている。このことは各地の生産費調査結果をみても明らかな通りである。

したがって、上記にのべた諸手法を現地に適用するためには、適用すべき地域の数値をつかむ必要がある。